

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 23 年 4 月 30 日現在

機関番号：42304

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21610027

研究課題名（和文） 「音環境をいかした保育」のカリキュラム開発

研究課題名（英文） Curriculum development of child care capitalizing on sound and music

研究代表者

岡本 拓子（OKAMOTO HIROKO）

高崎健康福祉大学短期大学部・児童福祉学科・教授

研究者番号：80309442

研究成果の概要（和文）：本研究では、保育実践における音環境を保育者がどのように構築すべきかを明らかにするため、保育者のための「音環境チェックリスト」を活用したワークショップ・プログラムの開発を行った。このプログラムは、チェックリストへの回答、グループディスカッション、発表、そして1週間音日記をつけた後に、最終的な振り返りを行うというものである。

研修を終えた後、保育者は音環境に対する意識が改善されたという結果が得られた。

研究成果の概要（英文）：This dissertation attempts to show how teachers can realize construct the sound and music environment in their child care practice. The study is based on a curriculum program which we developed for the care capitalizing on sound and music for teachers.

This program is composed of, answering the checklists, group discussion, presentation, and then writing diaries about sound and music environment for the period of a week.

After completion of this program, the result of improvements in consciousness to the sound and music environment of teachers has been verified.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
21年度	1,900,000	570,000	2,470,000
22年度	800,000	240,000	1,040,000
23年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：時限

科研費の分科・細目：子ども学(子ども環境学)

キーワード：①音環境，②保育，③カリキュラム，④表現，⑤サウンド・スケープ

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

筆者らは平成19年度より、幼稚園、保育所にて騒音計による調査、保育の観察、および保育者への聴き取り調査などを行い、「望ましい音環境」のあり方について検討してきた。

その結果、保育現場では、子どもにとって必ずしも「望ましい音環境」が整えられているとはいえない現状があり、保育における音環境を保育者が意識的にとらえ、積極的に保育の中にかかしている園と、それに対して保育者の注意がほとんど払われていない園のあることが明らかになった。

また、調査結果ら、保育者が音環境について配慮すべき重要なこととして以下の項目を明らかにした。

まず、(1)物理的・空間的要素として、「場の特性と遊びの特性を考慮した空間作り」、「音・音響がフィードバックできる環境作り」、「様々な音や音楽に出合う環境作り」、「遊具の質感やモノが発する音に対する意識をもつ」、次に、(2)人的要素として、「友だちの声、言葉、音への気づきを促す」、「遊びの中での自分の発する声や音への気づきを促す」、「人的な音環境としての保育者の存在を意識する」、そして(3)その他の要素として、「五感を働かせる中での『聴く』行為を意識する」、「様々な音への気づきを促す配慮や、音環境の精査を行う」という配慮である。

また、これらのことから、①物理的・空間的環境、②人的環境、③保育の内容・方法・援助、④子どもの様子の4つのカテゴリー、42項目からなる「『望ましい音環境』のためのチェックリスト」試行版を作成し、保育者が自らの保育の中で音環境を意識的にとらえる際の指標を示した。

本研究では、これまで明らかにしてきた研究成果を踏まえ、筆者らが改訂を繰り返しながら作成したチェックリストを活用した「望ましい音環境作り」のために保育者らがどのように意識的に環境をとらえることができるのか、そのための「音環境をいかした保育」についての保育者向けワークショッププログラムの開発と、保育実践カリキュラムの開発を試みた。

2. 研究の目的

本研究の目的は以下の3つである。

(1) 保育における望ましい音環境のためのチェックリスト改訂版を用いて保育者を対象とした調査を実施し、子どもにとって望ましい音環境を構成し、それらを保育にいかしていくための音環境の構成要素について明ら

かにする。

(2) 上記調査結果から、保育における望ましい音環境のためのチェックリスト完成版を作成する。

(3) チェックリスト完成版を用いた保育者向けワークショップを開催し、ワークショップの実施により保育者の音環境に対する意識がどのように変化するかを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) チェックリスト改訂版を用いた調査

チェックリスト改訂版を用いた調査は、東京・千葉・群馬・大阪・広島・佐賀・熊本の公立、国立大学法人立、及び私立の、幼稚園(68園)・保育所(52園)・認定子ども園(1園)に勤務する保育者を対象として実施した。公立は自治体の担当部署を通して、それ以外はそれぞれの園を通して調査用紙の配布・回収を行った。回答はすべて無記名で行い、回収の有無や内容について園に識別できないようにした。調査実施期間は2009年10月～12月であり、750部回答が得られた。

チェックリストは試行調査(2008)の42項目の試行結果から答えにくい等の指摘があった項目を精査し、改訂版「保育における音環境チェックリスト」を作成した。

チェックリスト改訂版は「1. 保育者が把握している物理的・空間的環境」「2. 保育者が行う物理的・空間的環境構成」「3. 人的環境としての保育者のあり方」「4. 音や音楽に関わる保育活動」「5. 子どもの様子」各8項目の全40項目で構成した。

回答者の保育経験年数は、平均16.9年(SD11.57)であり、最も多かったのは2年(回答のあった725名中40名)であった。

また、現在勤務している施設は、公立保育所(457名)、私立保育所(28名)、公立幼稚園(177名)、私立幼稚園(52名)、認定こども園(11名)だった。幼保や公立・私立の差異はみられず、公立保育所、公立保育園に所属する対象者が他に比べて多いため、園種別による分析は行わなかった。

回収されたうち、質問項目が未記入だった分を除いた735部を分析対象とした。各質問項目は、4段階で回答を求め、「そうしている」を4点、「時々」3点、「たまに」2点、「そうしていない」1点として、分析を行った。なお、本研究における分析にはSPSS ver.19.0を使用した。

(2) チェックリスト完成版の作成

チェックリスト完成版は、上記(1)で実施した改訂版の調査結果を基に項目を作成した。

項目の詳細については成果の中で挙げる。

(3) 保育者向けワークショップの実施とその効果の検証

チェックリスト完成版を用いた保育者向けのワークショップを実施し、それを通して保育者の音環境に対する意識がどのように変容していったかを明らかにした。ワークショップは2011年4月23日、大阪府O保育園の保育者27名を対象に実施した。まず、ワークショップの趣旨とチェックリストの概要について筆者らが説明し(約30分)、各自でチェックリストに記入(約40分)、その後、1グループ4~5人程度になるように0歳児担当、1~2歳児担当、3~5歳児担当に分かれチェックリストを基にグループディスカッションを行った(約1時間)。ディスカッション終了後、各グループで話し合ったことを報告し、園長、主任保育者、発表者らを交えてさらにディスカッションを行い、最後に、ワークショップに参加した感想を各自記入してもらった。

また、ワークショップ実施翌週の1週間、参加した保育者らに「音日記」を書いてもらった。「朝、外に出て最初に聞いた音」、「ゆうべ寝る前に最後に聞いた音」、「今日聞いた中で、一番大きかった音」、「今日聞いた中で一番きれいだった音」、「今日聞いた中で、一番お気に入りの音」、「今日聞いた中で、ドキドキした音」など、音に関することを自由に記述してもらう方法を取り1週間、音日記を書き終えた後にその感想も書いてもらった。

4. 研究成果

(1) チェックリスト改訂版を用いた調査

本調査では、保育における音環境についての保育者の意識を明らかにするために、音環境の構成要因を抽出した。その結果、<音への関わり><音楽活動への接触><音環境の構成><環境音への気づき>の4つの要因が見いだされた。この中で、<音への関わり><音楽活動への接触>の2つは子どもの側の要因であり、<音環境の構成><環境音への気づき>の2つは保育者側の要因である。

<音への関わり>は、子どもが友達や保育者などの人的環境や、自然や生活、遊びなど物理的環境の中の音に関わる項目であり、4つの構成要因の中で最も平均値が高かった。保育者は、子どもが直接関わる環境についての意識は高いことが見いだされた。

<音楽活動への接触>は、子どもが集団での音楽活動や、楽器や音の出る素材の音色や音について関わったり、文化芸術的音楽や伝統芸能への接触に関する項目であり、4つの要因の中では最も低かった。実際には保育の

中で子どもたちは自発的に歌を歌ったり、音をつくり出して遊んでいることは少なくないが、それに対して楽器を子どもの身近におくなどの配慮を意識して行っている保育者ばかりではないと解釈することができる。また、文化芸術的音楽や伝統芸能への接触は、個々の保育者の意識というよりも園の方針や保育行事が反映されるので、他の要因に比べて、低くなったと考えられる。

<音環境の構成>は、保育者が保育の中の友達や保育者、生活や自然などの音環境について構成している意識の項目である。<環境音への気づき>は保育者の環境音への気づきに関する項目であり、園の環境そのものについての意識はあまり高くないことが見いだされた。

これらの4要因の因子間相関は、<音への関わり>と<音環境の構成>が.446、<音環境の構成>と<環境音への気づき>が高かった。保育者は、保育の中で音を含む環境を構成するという意識が強いため、構成した環境と子どもの行動としての音への関わりが高くなっていると考えられる。また、保育者がおこなう環境構成について意識の高低と、構成しない、あるいは、構成することができない環境音についての意識は関連していると考えられる。

(2) チェックリスト完成版の作成

上記のとおり、チェックリスト改訂版を用いたの保育者を対象とした調査の結果から、筆者らはさらにチェックリストを改訂して完成版を作成した。

チェックリスト完成版は、音や音楽に関わる子どもの様子や、保育者の音や音環境に対する意識について、「よくあてはまる」から「全くあてはまらない」までの4段階で回答する項目(19項目)と、記述式で回答する項目(8項目)からなる。

4段階で回答する項目

- 1) 子どもは、身近な楽器や音の出る素材の音色や音の違いに興味をもち、自ら関わろうとしている。
- 2) 子どもは、様々な素材を用いて、一人でまたは子ども同士で関わりながら、音作り、音楽作りを楽しんでいる。
- 3) 子どもは、文化、芸術としての音や音楽に興味をもち、自ら関わろうとしている。
- 4) 子どもが、身近な楽器や音の出る素材に自ら関わり、親しむような保育活動がある。
- 5) 子どもが、文化、芸術的な音楽や伝統芸能(生の演奏、お囃子、和太鼓など)にふれられる機会がある。
- 6) 集団での音楽活動(歌や合奏など)を発表

する機会がある。

- 7) 子どもは、自然の中の様々な音に興味をもち、自ら関わろうとしている。
- 8) 子どもは、友だちや保育者の発する音、声、音楽に興味をもち、自ら関わろうとしている。
- 9) 子どもは、生活の中にある様々な音、声、音楽に興味をもち、自ら関わろうとしている。
- 10) 子どもはあそびの中で、即興的に歌うことを楽しんでいる。
- 11) 保育者は、子どもが生活の中にある様々な音に注意を向けるような環境を整えている。
- 12) 保育者は、子どもが自然の中で様々な音に気づくような環境を整えている。
- 13) 保育者は、子どもが身近な楽器や音の出る素材の音色や音の違いに気づくような環境を整えている。
- 14) 保育者は、子どもが自分・友だち・保育者の発する音、声、音楽に注意を向けられるような環境を整えている。
- 15) 保育者は、園にある自然の中の、様々な音に気づいている。
- 16) 保育者は、園の中にある様々な生活音に気づいている。
- 17) 保育者は、園にあるモノ（机や椅子など）が発する音の大きさや質に気づいている。
- 18) 保育者は、園にある遊具（積み木やブロックなど）が発する音の大きさや質に気づいている。
- 19) 保育者は園の中で、音がよく響く場所とあまり響かない場所を把握している。

記述式で回答する項目

- 1) どもの遊びが、保育者の発する音、声、音楽によって誘発されると感じるのはどのような場合(状況)ですか。具体的にお答え下さい。
- 2) 保育者自身が発する物音を意識するのはどのような場合(状況)ですか。具体的にお答え下さい。
- 3) 一人一人の子どもや状況に応じて、言葉を選んで語りかけるのはどのような場合(状況)ですか。具体的にお答え下さい。
- 4) 保育者自身の子どもに語りかける声の大きさや調子をどのように意識しますか。具体的にお答え下さい。
- 5) 保育者自身が言葉だけで子どもに指示してはいないか注意する場合、どのように意識しますか。具体的にお答え下さい。
- 6) 絵本などを読む際の声の大きさや調子をどのように意識しますか。具体的にお答え下さい。
- 7) 保育者自身の歌う際の歌声の大きさや声

色をどのように意識しますか。具体的にお答え下さい。

- 8) 保育者自身の楽器を演奏する際の音の大きさや音色をどのように意識しますか。具体的にお答え下さい。

(3) 保育者向けワークショップの実施とその効果の検証

チェックリスト改訂版を用いて、実際に保育者を対象としたワークショップを行い、その後、ワークショップに参加した保育者に、1週間音日記をかいてもらった。

ワークショップ

各自でチェックリストに記入し、その後グループディスカッションおよび発表を経た結果、保育者の気づきは次のように分類された。まず、「保育者自ら発する音・声に対する気づき」として①保育者自身の声(大きさ、声色、抑揚、言葉かけのタイミングや内容)、②楽器等を演奏する際の音(大きさや音色)、③保育者の動作に伴い発生する音(足音やモノを動かす音等)などがあつた。

具体的な記述内容として、以下のものが挙げられる。

- ・保育者自身の声(大きさ、声色、抑揚、言葉かけのタイミングや内容)
「午睡時の静かなとき大きな声を出さない。」(0歳児)
「言葉だけでなく、身振りや手振りを入れて話す。」(1~2歳児)
「見本となるようはつきりと歌う。楽しいと思えるように歌のイメージによって声色を変える。」(1~2歳児)
「伝える内容によって口調やトーンを変える。危険な場面では注意が向くように大きな声で鋭い声で。」(3~5歳児)
「言葉とともに一緒に行動し、わかりやすく伝える。」(3~5歳児)
「絵本の内容や場面によって口調や抑揚を変える。」(3~5歳児)
「大きな声は武器だと思っていたが、普段大きな声を出していると、危険を知らせることができないと気づいた。」(3~5歳児)
- ・楽器等を演奏する際の音(大きさや音色)
「子どもの声が聞こえるくらいの大きさを演奏する。」(0歳児)
「聞いて耳に心地よい音色の楽器を選ぶ。」(0歳児)
- ・保育者の動作に伴い発生する音(足音やモノを動かす音等)
「0歳児は顔が床に近いので、自身の足音にも注意をする。」(0歳児)
また、「周囲の音環境に対する気づき」として、④園環境における場ごとの音の特性(静

かな場、賑やかな場の把握等), ⑤音環境を作り出す保育者の配慮, ⑥自然の音への気づきを促す配慮, などが挙げられた。

具体的な記述内容としては以下の通りである。

・園環境における場ごとの音の特性(静かな場、賑やかな場の把握等)

「1～2 歳児のクラスはオープンクラスなので、静かな場所、賑やかに遊んでよい場所を意識的に分けて保育をする必要があると感じた。」(1～2 歳児)

・音環境を作り出す保育者の配慮

「給食の時間にコップで机を叩いている子どもを注意していたが、音を楽しんでいるのかと見方が変わった。」(1～2 歳児)

「絵本を読むときには集中して聞けるよう落ち着いた雰囲気を作る。」(3～5 歳児)

「片づけのときなど、『音』を用いて生活場面を区切ることが多かったが、そのことに対して疑問を感じるようになった。」(3～5 歳児)

・自然の音への気づきを促す配慮

「自然の音を感じることができずなのに、保育者自身が気づいておらず、子どもたちに伝えることができていなかったことに気づいた。」(3～5 歳児)

音日記

1 週間音日記を書いた後の感想では、保育者の音や音環境に対する意識の変化や気づきは次のように分類された(()内の数字は回答数を示す(複数回答))。①自身の音に対する意識の変化(25), ②生活音やその他様々な音への意識の変化(14), ③音への意識化による保育の変化(9), ④自然音への意識の変化(8), ⑤音の感じ方への意識の変化(6), ⑥子どもと音との関わりへの気づき(6), ⑦好きな音/嫌いな音への気づき(3), ⑧保育に関わる「情報としての音」への気づき(3)である。

ワークショップでは、まずチェックリストにより、自身の音や音環境に対する意識の程度を確認し、次にグループディスカッションを通して、自分では気づけなかった視点やとらえ方があることを知ることができた。さらにワークショップ後に行う音日記では、日々の生活や保育の中で音に対する意識を明確にもつことの必要性や、それを保育にいかす工夫の必要性に気づくなど、チェックリスト、グループワーク、音日記が、保育者らの音や音環境に対する意識の変化に有効に働くことが示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

松寄洋子, 吉永早苗, 岡本拓子, 無藤隆, 新

開よしみ 保育現場の音環境に関する意識の構成要素と関連要因 埼玉学園大学紀要 人間学部篇 査読有 第 10 号 2010 199-209

www.media.saigaku.ac.jp/bulletin/pdf/vol10/human/17_matsuzaki.pdf

〔学会発表〕(計 6 件)

岡本拓子(代表) 音環境をいかした保育(1)
- 「望ましい音環境」のためのチェックリスト試案 日本保育学会第62回大会 2009年5月16日 千葉大学

松寄洋子(代表) 音環境をいかした保育(2)
- 「望ましい音環境」のためのチェックリスト試行調査 日本発達心理学会第21回大会 2010年3月28日 神戸国際会議場

岡本拓子(代表) 音環境をいかした保育 (3)
- 保育における「音環境マップ」活用の試み 日本保育学会第63回大会 2010年5月23日 松山東雲女子大学

新開よしみ(代表) 音環境をいかした保育(4)
- 保育における音環境チェックリスト調査 日本保育学会第63回大会 2010年5月23日 松山東雲女子大学

岡本拓子(代表) 音環境をいかした保育 (5)
- 幼稚園3歳児クラスの観察から 日本発達心理学会第22回大会 2011年3月26日 東京学芸大学

岡本拓子(代表) 保育における音環境に対する保育者の気づきチェックリストとワークショップを通して 日本発達心理学会第23回大会 2012年3月10日 名古屋国際会議場

〔図書〕(計 1 件)

岡本拓子 フレーベル館 THE 保育 Vol.3 2010年 166-171

6. 研究組織

(1)研究代表者

岡本 拓子(OKAMOTO HIROKO)
高崎健康福祉大学短期大学部 児童福祉学科・教授
研究者番号：80309442

(2)研究分担者

新開 よしみ(SHINKAI YOSHIMI)
東京家政学院大学 家政学部・准教授
研究者番号：53369352

松寄 洋子(MATSUZAKI YOKO)
埼玉学園大学 人間学部・教授
研究者番号：93331511

吉永 早苗(YOSHINAGA SANAE)
ノートルダム清心女子大学 人間生活学
部・教授
研究者番号：83200765

(3)連携研究者

無藤 隆(MUTO TAKASHI)
白梅学園大学 こども学部・教授
研究者番号：40111562